オルテガにおける「少数者」をめぐって

大町　公*

はじめに

かつて筆者は勤めから帰って、ぼんやりプロ野球の放送を聞いていた時、いまだ試合前であったろうか、元プロ野球選手であり、現解説者の坂東英二が何気なく、あるいはピッチャーとしての自らの過去を思い浮べながらであろうか、「男にとって実に辛いのは、自分の器を思い知らされる時だ。」といったようなことを言うのを聞いた。思わずドキッとし、くつろぎつつあった気持ちが一瞬にして冷えたことを覚えている。人の値打ちを批評する場合にはいとも簡単、面白おかしくやってのけるくせに、自分の本当の価値だけは人に知られたくない。いや、自分自身ではなおのこと知りたくない。人にはどうやらそんな心持ちがあるようだ。自分の器がいかなるものであるか。視点は異なるが、二十世紀スペインの哲学者ホセ・オルテガ・イ・ガセ（一八八三―一九五五）は『大衆の反逆』（一九三〇年刊）の中ですべての人間を「少数者」と「大衆」とに分類している。われわれはいずれに分類されているのか、自らを絶えず吟味しつつ、その論を辿ってみることにしよう。

一、少数者と大衆

「社会というものはつねに、少数者（minorías）と大衆（masas）という二つの要素からなるダイナミックな統一体である。[1]」

オルテガは現代の大衆を分析するにあたり、まず従来の、一般的な意味での大衆と少数者について考察する。「選ばれた」とか、「すぐれた（excelente）」とかいった言葉を冠せられるこの「少数者」と大衆に分けることは、人々を社会的な階層に分けることではなく、言わば人間的な階層に分けることである。少数者とは特別な資質を備えた人およびそういう人達から成る集団であって、大衆とはいわゆる労働者大衆を指すのではなく、特別な資質を持たない人々の全体のことである。以前ならば、上層階級に少数者の大部分がいたこともあろうが、今日では、各々の社会的階層に少数者と大衆がおり、以前には大衆の集まりそのものであった労働者層の中にもすぐれた精神の持ち主がいる。

それではまず大衆について見ることにしよう。

大衆とは平均的な人間のことであり、万人に共通したもの、社会において特定の所有者を持たぬものから成り、他人と異なっていないというより、自ら進んで類型的な形を繰り返すのである。このように大

平成２年９月29日受理　＊倫理学研究室

衆は「心理的事実」として定義されるのだから、何も集団をなしている必要はなく、一人でも大衆と呼ぶことができる。大衆とは自分に特別な価値を見出すことなく、自分が「すべての人」と同じであると感じ、そのことに苦痛を感じるのでなく、喜びをこそ覚える人たちである。彼らは自分に何ら特別なことを課すこともなく、現にあるがままの自己を保持するだけで、自己を完成させようなどとは決して思わないのである。

このように、オルテガの分類はもっぱら人の「在り方」、「生き方」にかかわるもので、政治的な意味合いはなく、社会的な階層とも本質的に無縁な分類である。

二、少　数　者

他方、「少数者」とはわれわれにはいささか耳慣れない言葉である。マダリアーガ（一八八六―一九七八）も言うように、「スペイン語で『ミノリーア（少数者）』と表現される概念が、フランス語でエリート（élites）、英語でリーダー（leaders）と言われるものに相当する。[2]」ただそれが「少数者」と呼ばれているところにスペイン独特の事情があると彼は言うのだが、ここではそれはさておくことにしよう。

少数者については量的にも多くないので、そのまま引用することにする。

「『選ばれた少数者』について語られる場合、よくある悪意のために、普通この言葉の意味が歪曲されている。つまり選ばれた人間とは、他人よりも自分がすぐれていると考える厚顔な人間ではなく、自分では達成できなくとも、他人よりも多くの、しかも高度の要求を自分に課す人間であるということを、知っていながら知らないふりをしているのである。[3]」

「選ばれた人間、つまりすぐれた人間は自分から進んで彼を越えるものに、彼よりもすぐれた規範に奉仕しようとする内面的必然性をそなえている。・・・一般に考えられているのとは反対に、本質的に奉仕に生きている者は選ばれた被造物であって、大衆ではない。すぐれた人間は、自分の生を何か超越的なものに奉仕させないと生きた気がしないのだ。したがって彼は、奉仕しなければならないことを圧迫だとは考えない。たまたま奉仕する対象が欠けると不安を感じ、自分を押えつける、より困難で、より求めることの多い新しい規範を発明する。[4]」

オルテガはまた少数者は言葉の本来の意味での「貴族（nobleza）」であると言って、こうも書いている。

「高貴な人とは『知られた人』を意味する。無名の大衆から抜きんでて自己の存在を知らせた人、すべての人が知っている人、有名な人のことである。この言葉には名声をもたらした測り知れない努力の意味が含まれている。したがって高貴な人とは、努力をした人、すぐれた人と同じである。[5]」

「私にとって、貴族とは活力に満ちた生と同義語である。つまり自分自身を越え、すでに獲得した物を越えて、自らに対する義務や要求として課したもののほうへ進もうと、つねに身構えている生のことである。[6]」

「そうした人たちにとって、生きるということはたえざる緊張であり、不断の鍛練なのである。鍛練＝askesis。彼らは苦行者なのだ。[7]」

先に述べたことも合わせて、まとめてみるならば、おおむね次のようなものになろう。

少数者は

1、生来、特別な資質に恵まれている。

2、自分に対し他人よりも多くの、高度な要求、義務を課す。

3、自分よりもすぐれた規範に奉仕する。
4、並はずれた努力、飽くなき努力をする。
5、現にあるがままの自己を絶えず乗り超えようとする。
6、自分の内にそのような「必然性」を備えている。
もう一つ加えよう。オルテガは「賢者」と「愚者」について言っている。

「賢者は、自分がもう少しで愚者になり下がろうとしている危険をたえず感じている。そのため彼は、身近に迫っている愚劣さから逃れようと努力するのであり、その努力のうちにこそ英知があるのだ。ところが愚者は自分を疑うことをしない。彼は自分がきわめて分別に富む人間だと考えている。愚鈍な人間が自分自身の愚かさのなかに腰をおろして安住するときの、あのうらやむべき平静さはそこから生まれている。[8]」

ここで賢者とはもちろん少数者を、愚者とは大衆をさすであろう。オルテガの別の言い方では、人間は「難破者（náufrago）」であるとか、生は「ドラマ」であるとかいったことの自覚の有無が「賢者」と「愚者」とを区別するのである。

7、生が「危険」を本質としていることを自覚している。

三、少数者の役割

社会には特別な資質、能力を必要とする仕事、活動、職務がある。こういった特殊な活動は従来すべて少数者によってなされてきた。大衆はあえてそれに口をさしはさもうとはしなかった。少数者の創り出した規範あるいは審判にも従順であった。社会とは少数者と大衆による「ダイナミックな協調」であって、「大衆は健全な社会の力学的関係のなかでの自分の役割を知っていたのである。[9]」『大衆の反逆』に先立つこと九年、一九二一年に刊行された『無脊椎のスペイン』では、両者の関係を「模範性と従順（ejemplaridad y docilidad）」によって説明している。

われわれは自分よりすぐれた人、物事を自分よりうまくやる人を見る時、自分もそのようにやってみたいとか、そういう人になりたいとか願うものである。ここでオルテガが取り上げるのは「模倣（imitación）」したいという願望ではない。「模倣」とは外面的な、単なる見せかけであって、人格にかかわっていない。オルテガは人格そのものに関係する「同化（asimilación）」について言う。

「反対に、われわれの前に現われる模範的人物に同化する場合には、われわれの全人格は、この人物の存在様式に向けられ、われわれが敬服している模範に従い、ほんとうにわれわれの本質を変える心づもりになる。要するに、この人物の模範性を模範性として感ずるのであり、われわれはこの模範に対して従順さを感じるわけである。

これが、あらゆる社会を創り出す基本的メカニズムである。少数者の模範性は多数者の従順さの中で実を結ぶ。その結果、模範性は広まり、劣った者はすぐれた者と同じ方向で完成に近づく。[10]」

「少数者の模範性」の及ぼす力を「魅力的な力」とか「精神的引力」と呼んでいるところからも、この「力」はベルクソン（一八五九―一九四一）の『道徳と宗教の二つの源泉』（一九三二年刊）における「神的人間の招き（l'appel du héros）[11]」を思い起こさせる。かかる模範的人物は単にすぐれた政治家のみを意味するものではない。すぐれた学者、芸術家、軍人、労働者、産業人、さらに社交家等様々な種類がある。彼らがそれぞれの領域で模範となって人々に影響し、社会全体を形成しているのである。

少数者は大衆を「支配する（mandar）」。「支配するということは単なる説得でもなければ、単なる強制でもない。それは両者が絶妙に

融合したものである。命令するという行為にはすべて、精神的鼓舞と物理的強制の両者が緊密に結合している。[12]」支配とは権威の正常な行使であり、いつの世にも世論に基づいて行なわれてきた。世論に抗した支配などありえないのである。すなわち支配とはひとつの意見の、ひとつの精神の優位を意味する。歴史上のある時代、ある集団が支配したということは、これこれの「意見の大系」が支配的であったということである。そして文化と言い、文明と言いこういった「意見の大系」以外のものを指すのではないのである。

少数者は大衆に対しひとつの目標、事業、つまり「生の計画」への、ひとつの偉大な歴史的運命への参加を呼びかける。支配するとは人々に仕事を与えること、人々をそのあるべき運命の中に、その軌道の中へと引き入れることである。言い換えれば、彼らに対し生の逸脱を防いでやることでもある。こういった共同作業の中で、「ダイナミックな協調」が実現されてきたのである。オルテガは通例「支配する」とか「命令する」とか訳されるmandarという動詞を使うのだが、そのまま訳するのはどんなものだろう。と言って適当な訳語もない。多少の曖昧さを覚悟の上で「リードする」とでも訳する方がましだろうか。

オルテガは〈少数者と大衆〉という関係を、世界における国々にも当てはめている。この訳語を使って紹介してみよう。これまで世界をリードしてきたのはヨーロッパ、中でもイギリス、フランス、ドイツの三国である。しかし現代のヨーロッパは世界をリードする自信を失っている。アメリカとソ連がリードしているかのように見えるが、いずれも「若い国」であり、苦しんだ経験がない。本当に世界をリードできるのは苦い経験を積み重ねてきたヨーロッパしかなく、もう一度ヨーロッパが世界をリードするためには、その潜在力を容れるにふさわしい器として、ヨーロッパ連合を形成する必要があるだろうと、今日のEC統合を予言する発言をしているが、そのこと自体は拙論と関係はない。

四、現代の大衆、大衆人

ここまで、オルテガにおける少数者と大衆がいかなるものであるのかを辿ってきた。しかし現代の大衆はこれまでの大衆とは同じではない。すこぶる趣を異にしているのである。オルテガは現代の大衆に属する個体を特にhombre-masa（「大衆人」あるいは「大衆人間」と訳される場合が多い）と命名している。

師森口美都男はその著『現実』の中の「全体主義イデオロギーの発生―庶民の没落について―」において、「私はオルテガの用語をかりて、以下『堕落した民衆』（corrupt people）を『大衆』（mass）とよび、この大衆に属する個体を、『大衆人間』（mass-man）とよぶ。[13]」と書いている。この書き方は原著を読む限りでは、正確でないようにも思える。オルテガにより一貫して否定的な意味が与えられているのは現代の大衆、大衆人、すなわち反逆せる大衆、堕落した大衆であって、「大衆」ではないからである。そういう意味では、この「大衆」はわれわれの耳には「民衆」、あるいは「庶民」の方が近いのかもしれない。現にオルテガ自身、大衆に関して「『民衆』（pueblo）―当時彼らはそう呼ばれていた。[14]」と言っているところがあり、オルテガの方が精確さを欠いているとも言える。しかし彼自身が便宜上ほとんどの場合「大衆」の一語で済ましているので、筆者もこれに従わざるをえないだろう。繰り返すが、現代の大衆―その個体が大衆人―は言わば頽廃した大衆であって、従来の大衆とは根本的に異なるのである。現代日本語の語感との多少のずれは致し方なかろう。

では次に大衆人についてのオルテガの考えを略述してみよう。

大衆人の出現を可能にしたのは十九世紀のヨーロッパの文明、集約すれば「自由主義的デモクラシー」と技術（科学的実験と産業主義）

であろう。かつて大衆にとって、生きるということは自らの周囲に様々な困難、危険、欠乏、制約、隷属等を見出だすことに他ならなかった。ところが今日、物質的領域においては、経済的諸問題の解決によるその安定、また道路、鉄道、電信、ホテル等様々な快適さの増大、薬の発達等衛生面の向上、市民的領域においては、法の前での平等が確立され、身分も階層もなくなり、いまや生を拘束、抑制するものがない。これはまったく新しい世界の誕生であって、人々の生き方も当然のことながら一変する。

大衆人は生まれながらにして、生は容易であり、豊かで有り余り、何の制約をも持っていないとの印象を抱いている。彼らは支配と勝利を実感する。この実感のゆえに、彼らはあるがままの自分を肯定し、自らの道徳的、知的財産は立派で、完璧なものと思っている。自己満足の結果、外部からの働きかけに対して自己を閉ざし、他人の言葉に耳を傾けず、他人を考慮しなくなる。大衆人の魂は実に「自己閉鎖性」と「不従順」とから成っているのである。彼らは相手に道理を説くことも、自ら道理を持つことも望まず、あらゆることに介入し、なんの手続き、配慮もなしに、言わば「直接行動」によって、自分の低級な意見を押しつける。彼らは「甘やかされた子供」あるいは反逆的な野蛮人を思わせる。こういった大衆人こそ現代人のことであり、また〈われわれ〉と置き換えてもさしつかえないだろう。

大衆の反逆とは、大衆が少数者に対する尊敬の念を失い、不従順となり、少数者に倣うことも、それに服従することもなく、逆にこれまで少数者のみが占めていた地位から少数者を押し退け、自らは大衆のままであるにもかかわらず、この地位を奪おうとすることである。現代ではもはやその人が大衆人であるか否かは家柄、職業、社会的地位、権力等々とは何らの関係もない。言い換えれば、現在リーダー的地位にある者が、果たしてリーダーに値する人物であるかどうかは十分疑ってかかる必要がある。森口も指摘しているように、「一国の総理大臣もマス・マンでありうるし、僧侶も作家も科学者もマス・マンでありうる。」[13] 大学教授が例外でないのは今さら言うまでもなかろう。

『大衆の反逆』は当然のことながら、大衆人を分析したものであり、少数者そのものについての記述は必ずしも多くない。それらは先に引用したとおりである。しかし大衆人分析の過程で、少数者としては当然備えておらねばならぬいくつかの条件が出てくる。私は以下でそのうち最も重要と思われるものを取り上げてみることにしよう。

五、自分よりすぐれた審判

自分の器がいか程のものであるか。オルテガ流に言えば、自分という人間は少数者に属するのか大衆に属するのかということになってしまうが、彼の考え方が自らの器を判定する上で大いに役立ってくれるだろうといった期待を持ってここまで進んできた。

オルテガにこういう言葉もある。

「人は成長するにつれ、大部分の男が—それに大部分の女も—外的必然に対する反応のような厳密にいえば課せられた努力を除けば、そのほかにはなんらの努力もすることができないのにいやというほど気づく。」[14]

人は歳をとるにつれて努力しなくなる。平凡な、だが恐ろしいまでの真実ではないか。不惑を過ぎた筆者には冒頭の坂東氏の言葉に劣らずこたえるのである。自分の本当の姿を認めたがらないのは人情とはいえ、ここまで来ればすでに答えは出ていよう。が、いましばらく論を進める。少数者についてもう一度思い起していただきたい。

選ばれた人間、すぐれた人間、即ち少数者とは、努力する人のことである。多少の努力なら誰でもしようが、少数者の行なうのは飽くなき努力、人並はずれた努力である。少数者は自分から進んで自分を超

えるものに、自分よりすぐれた規範に奉仕しようとする。そのような内的必然性を備えている。自分の生を何か超越的なものに奉仕させないと、生きている気がしない。彼にとって奉仕は圧迫ではない。奉仕する対象を失うと、かえって不安を覚え、より困難でより求めることの多い規範を自ら作り出そうとする。本質的に奉仕に生きているのは大衆ではなく、少数者の方である。これが「規律から成る生」であり、「高貴な生」である。生を高貴にするものは、自らに課す多くの要求、義務であって、決して権利などではない。自分にはたとえ達成できなくとも、人より多くの、しかも高度な要求をあえて己れに課す。他人にではなく、己れに対してこそすこぶる厳しい人である。彼らは他人よりもすぐれていることを自慢するような傲慢な人ではない。Noblesse oblige.にほかならない。かのゲーテも言っているではないか。「恣意に生くるは凡俗なり。高貴なる者秩序と法にあこがれる。」彼らにとって、生きるとは絶えざる刻苦勉励であり、不断の鍛練である。彼らは言わば「苦行者」なのである。

しかし少数者の要件として今一つ強調しておかねばならないことがある。それは「自分よりすぐれた審判」についてである。大衆人はそういった審判を持たない人間として特徴づけられている。

「中国の農夫は少し前まで、自分の生活が安楽なのは皇帝がそなえたまう個人的な徳のせいだと信じていた。だから彼らの生は、いつでも自分が頼りにしている最高審判官のほうに向けられていた。しかし、われわれがいま分析している人間（大衆人のこと―筆者注）は、自分以外のいかなる審判にも訴え出ないことに慣れている。[17]」

「自分以外のいかなる審判」にも訴え出ないことが大衆人の特徴であるばかりでなく、「自分よりもすぐれた審判」に訴えることが少数者であることの不可欠な条件でもある。先の引用では「自分から進んで彼を越えるものに、彼よりもすぐれた規範に奉仕しようとする内面的必然性をそなえている。」となっていた箇所に関連していよう。オルテガは言っている。

「真の哲学―これがヨーロッパを救いうる唯一のもの―が再びヨーロッパを支配する日が訪れた日には、人間とはその本質上、好むと好まざるとにかかわらず、自分よりすぐれた審判（instancia superior）を求めざるをえない存在であることがふたたび認識されるだろう。もしその審判を自力で発見できれば、それはすぐれた人間であり、もし発見できなければ、それは大衆人なのであり、すぐれた人間からそうした審判を受けとる必要があるのだ。[18]」

「中国の農夫」同様、かつて大衆は誰でも自分よりもすぐれた審判を持っていた。そういう審判はいつの世も少数者から与えられ、彼らもまた素直にそれを受け入れてきた。分をわきまえていたのである。その審判として、たとえば「宗教、タブー、社会的伝統、習慣」が挙げられている。[19]

すぐれた人間、少数者とは、逆説的に聞こえるかもしれないが、自分よりすぐれたものが何であり、あるいは誰であるのかをよく知っており、そのものを常に自らの規範あるいは審判として尊重している人を言う。しかもそれを「自力で発見でき」なければならないのである。言い換えれば、その審判をまさに「自分よりすぐれた審判」の名に値するものとしている根拠をばしっかりと握っているということである。これこそ少数者に属するか否かを判定する、おそらく最も重要なポイントとなろう。

六、結論―運命について―

清水幾太郎は『倫理学ノート』の末尾、「余白」の中で、すべての人間を果たして平等と見るべきであろうかと自問したあと、オルテガ

の〈少数者と大衆〉といった区別に触れて、「道徳の方面から見れば」と断りつつも、「それが望ましいか否かは別として、現実の社会には、こういう二つのグループがあるようである。[20]」と肯定している。大事なことは、氏も言うようにあるがままの現実を見ることであって、「望ましい」形といった願望を投影した見方であってはなるまい。

少数者と大衆の区別は、繰り返せば「生き方」、「在り方」による区別であり、倫理面での区別である。質的な区別であり、しかも次元を異にする区別である。この区別はプラトンの哲学者と大衆のそれを思い起させる。両者の間には、ある越えがたい開きが存在するのである。大衆の中の誰かが人並はずれた努力を行なうことによって少数者の一員に迎えられるということもありえないし、少数者のうちの誰かが堕落することはあっても、大衆になり切ることはありえまい。

少数者と共に、社会の中に大衆が存在するのは現実であって、その在り方といえども非難さるべきものではない。彼らはこれまで社会の中で自らの分をわきまえていたのである。その限りにおいて、以前の「百姓」に関し「私たちは、彼の日常の深い静謐さ、自己の運命を泰然と見送るその威厳に満ちた落ち着きとに感嘆するのです。」といった称賛の言葉も聞かれるのである。もっともその後、「しかし今はこうしたお百姓さんはわずかしか残っていません。[21]」と付しているが。少数者として生まれるか、大衆として生まれるかは、オルテガの用語で言えばまさしく「運命(destino)」である。「運命」についてはたとえばこう言っている。

「運命—生としてこうあるべきだとか、あるべきではないとか—は議論さるべきことではなく、それを受けいれるかいなかの問題である。もしわれわれがそれを受けいれれば、われわれは真正な自己である。もし受けいれなければ、われわれは自分自身を否定し、偽造することになる。運命とは、われわれがこうしたいと思うことにあるのではない。むしろ、したくないけれどしなければならないという意識のなかに、運命の厳しい横顔がはっきりとあらわれるのである。[22]」

すでに出てきた言葉を使えば、少数者にはそう生きるべく「内面的必然性」が備わっている。本人は「知っていながら知らないふりをしている」だけなのであろう。少数者には少数者として生きる「使命(misión)」が与えられ、大衆には大衆として生きる「使命」が与えられている。「不平等」、「差別」なる語もここでは色褪せてしまう。必然ならば、それ自体喜ぶべきことでもなければ、悲しむべきことでもない。受け入れるか否か。この問題が残されているだけである。もし受け入れなければ質的に低い生、モラルの低下した生を生きることになろう。

もっとも、現実のレベルにおいては、冒頭にも書いたように、「自分の器を思い知らされる」のは「実に辛い」ことであろう。そのこと自体、「自分の器」はほぼ生れつきのものであり、努力だけでは如何とも為しがたいことを示している。そういう意味では、大衆は大衆としての幸せを求めるべきであるし、また大衆の幸せしか幸せとして味わうことができないとも言えよう。少数者もまた同様であり、運命に従うかどうかという倫理の問題である。それなら少数者と大衆のどちらの方が幸せであるか。神のみぞ知ろう。

しかし今日「使命」とか「運命」といった考え方は、人々の馴染むところではない。それはそれらの語が古めかしい趣を持つところからも窺えようし、大時代的な政治文書や占いの世界にのみ通用する言葉といった印象すら与える。第一今日の大衆はそもそも自らの「使命」、「運命」に反逆した人たち、言い換えれば、いかなる規範にも従おうとしない人たちではなかったのか。

オルテガは『大衆の反逆』刊行七年後（一九三七年）に書かれた

「フランス人への序文」の中で、大衆人というものを理解すれば、自ずとこういう疑問がわくと書いている。彼らのもつ欠陥はヨーロッパを滅亡へと導きかねないが、果たして「このタイプの人間を矯正することができるだろうか。」そしてヨーロッパの「救いの可能性のすべてが懸かっているもう一つの決定的な疑問」として「大衆がかりに望んだとしても、個性的な生を目覚めさせることができるだろうか」[22]を挙げ、ヨーロッパの未来についてはかなり悲観的な見方をしている。先に引用したところに「真の哲学―これがヨーロッパを救いうる唯一のもの」とあったが、ここに言う「真の哲学」とはどのようなものであろうか。

さて、『大衆の反逆』には「神」についての言及がない。しかし先に引用した「人間とはその本質上、好むと好まざるとにかかわらず、自分よりすぐれた審判を求めざるをえない存在であることがふたたび認識されるだろう。」とある、その審判の候補として当然「神」が念頭あったろう。そのことは、『現代の課題』最終章「視点の理説」における次の感動的な一節においても窺えるからである。

マールブランシュは、われわれが真理を認識するのは、われわれが「神において、神の視点から」事物を見るからとしたが、オルテガはその逆、つまり「神が人間を通して事物を見るのである、あるいは人間は神の視覚器官である」と言ったほうが本当らしいとした後、次ぎのように言うのである。

「だからして、神がその遂行のためにわれわれを必要としているならば、彼を裏切らないようにすること、しかして、現存するこの場所に確固と立脚し、自己の有機体、生命的本性に深い忠実さをもってわれわれの環境に眼を開き、運命がわれわれに提出している仕事―『現代の課題』を引き受けること、これがわれわれの義務なのである。[23]」

しかしまた現代の大衆に直接的な形で「神」を持ち出すことの愚をよく承知していたろう。この著作『大衆の反逆』の使命は現代の人間を大衆人と命名し、それを分析し、世の人々に新しい人種の実体についていち早く警告することにあった。「神」そのものを論じ、人々の魂をその根底から揺さ振るためには別の文体を必要とする。そのような役割を与えられて登場したのは、おそらく『神よりの逃走』（一九三四年刊）、『われわれ自身のなかのヒトラー』（一九四六年刊）の作者、オルテガの同時代人でもあったスイスの聖人マックス・ピカート（一八八八―一九六五）であったが、オルテガは自身の使命を十二分に果たし終えた。ピカートとは割り振られた使命が異なったということであろう。

注

オルテガからの引用は『ガリレオをめぐって』を除き、すべて『オルテガ著作集』（白水社、一九六九年―一九七〇年）から行なった。主として取り上げた『大衆の反逆』（桑名一博氏訳）は現在でも同じ訳が同社から単行本として出版されており、最も手に入りやすいものである。同時に《Obras completas de José Ortega y Gasset》(Revista de Occidente,1961―1969) でのページ数をも示した。拙訳を用いなかったのは、筆者と異なる文体が必要と考えたからである。使わせていただいた先生方には感謝申し上げます。

(1) 第二巻、五七頁、Ⅳ,p.145

(2) 佐々木孝氏訳、『情熱の構造―イギリス人、フランス人、スペイン人―』（れんが書房新社、一九八五年）、一九二頁、《Ingleses, franceses, españoles.》(Editorial Sudamericana,Buenos Aires,1969),p.179

(3) 第二巻、五八頁、Ⅳ,p.146

(4) 同書、一一一頁、ibid.,p.181

(5) 同書、一一二―一一三頁、ibid.,p.182

(6) 同書、一一四頁、ibid.,p.183
(7) 同書、一一四頁、ibid.,p.183
(8) 同書、一一八―一一九頁、ibid.,p.187
(9) 同書、六〇頁、ibid.,p.147
(10) 同書三二九頁、III,p.104
(11) 森口美都男氏訳、『世界の名著』第五三巻（中央公論社、昭和四四年）、二四五頁、《Les deux sources de la moral et de la religion》(Presses Universitaires de France,Paris,1969),p.29
(12) 第二巻、二六二頁、III,p.55
(13) 『現実』―森口美都男哲学論集（二）―（晃洋書房、一九八一年）、二四八頁
(14) 第二巻、六七頁、IV,p.152
(15) 『現実』、二四八頁
(16) 第二巻、一一四頁、IV,p.183
(17) 同書、一一〇頁、ibid.,p.181
(18) 同書、一六八―一六九頁、ibid.,p.221
(19) 同書、一四九頁、ibid.,p.207
(20) 『倫理学ノート』（岩波書店、一九七四年）、三二七頁
(21) アンセルモ・マタイス、佐々木孝両氏共訳、『ガリレオをめぐって』（法政大学出版局、一九六九年）、一二七頁、V,p.86
(22) 第二巻、一五六頁、IV,p.212-213
(23) 同書、三九頁、ibid.,p.131
(24) 井上正氏訳、第一巻、二六八頁、III,p.203

En torno a las 'minorías' de Ortega y Gasset

Isao OMACHI

Resumen

Según "La rebelión de las masas", la sociedad es siempre una unidad dinámica de dos factores: minorías y masas. La división de la sociedad en masas y minorías no es una división en clases sociales, sino en clases de hombres.

Las minorías son individuos o grupos de individuos especialmente cualificados. La masa es el conjunto de personas no especialmente cualificadas.

El hombre selecto o excelente no es el petulante que se cree superior a los demás, sino el que se exige más que los demás, aunque no logre cumplir en su persona esas exigencias superiores. Está constituido por una íntima necesidad de apelar de sí mismo a una norma más allá de él, superior a él, a cuyo servicio libremente se pone. Contra lo que suele creerse, es el hombre selecto, y no la masa, quien vive en esencial servidumbre.

Ortega le llama 'nobleza'. Noble significa el conocido de todo el mundo, el famoso. Implica un esfuerzo insólito que motivó la fama. Para Ortega, nobleza es sinónimo de vida esforzada, puesta siempre a superarse a sí misma, a trascender de lo que es hacia lo que se propone como deber y exigencia. Es el hombre selecto, el noble, el esforzado, para quien vivir es una perpetua tensión, un incesante entrenamiento. Es el asceta.

Sobre las minorías, hay una otra cosa que decir. El hombre selecto sabe que el hombre es, tenga de ello ganas o no, un ser constitutivamente forzado a buscar una instancia superior. Si logra por sí mismo encontrarla, es un hombre excelente. Encontrar una instancia superior y llevarla consigo, será la cosa más importante.